

鳥浜ツアー 縄文妄想-2

本間一恵

以前縄文時代のかごの復元をした「あみもの研究会」から福井へのツアーの誘いがあった。(科学研究費 21H00591 の一部を使用) 11月は幸いコロナの感染も下火の時期で、黄葉の山の景色を楽しんできた。集合場所の敦賀駅に東北・関東・関西から集まったのは、特別参加も含めて総勢8名。

福井県立若狭歴史博物館

鳥浜貝塚といえば、縄文時代の繊維製品が見つかった数少ない遺跡として有名だった。近年は、各地から有機物の遺物の発見が相次ぎ、数少ない、という形容詞はふさわしくなくなったが、鳥浜の名前は依然として魅力的で存在に揺るぎはない。なにしろ発見されたのが60年も前なのである。そして、今もそこから新しい発見がなされている、というところがすごいのだ。

福井県立若狭歴史博物館で開催中だったのは、鳥浜貝塚発見60周年記念特別展「森と出会った縄文人ー人と植物の歴史の始まりー」(会期 2021.10.16-11.28)。「あみもの研究会」のメンバーの研究成果が大きく取り上げられており、以前復元実験で作ったかごも、佐賀県教育委員会から多数貸し出し展示されていた。

この特別展を見るだけでも十分足を運ぶ甲斐があったのだが、メンバーたちが目的の調査作業をしている間に、展示品以外の貴重な遺物までも、じっくり観察させてもらうことができた。

夜は、博物館主任の鯨本真友美さんも加わって全員で宿に泊まる。この企画展のためにすでに何度も訪れていた鈴木三男さんはリモートでの参加。

展覧会を担当した鯨本さんに寄稿をお願いしてあるので、展示については一旦保留にして、ここでは帰ってきてから勝手に進めた復元もどき作業について書き留めておくことにする。



復元もどき

カタログに観察図が載っていた 75P-013-B のかご。全体は残っていないのだが、縁のところ*にあるジグザクの波型網代模様が2色遣いになっているのが目を引く。横材が黒くて、他の部分とは明らかに違う色で、模様がはっきりと見てとれる。
(*縁始末は残っておらず、ここよりもっと上部が存在したなら縁部ではないので、残っている部分の上端部ということ。)

材料はタケ亜科とのこと。5年ほど前、福島の高屋敷遺跡の恐ろしく細かい編み目のかごを作った時に、国井秀紀さんが提供してくれた材料が、アズマネザサのヒゴだった。現物のスケール感には届かぬまま挫折していたのだが、その時の残りがまだ手元にあった。貴重な材をそのままにしておくのは心苦しいと思っていたので、ちょうどよい機会だと、それをもとに材の調整をはじめた。

かなり頑張ってみたが、編み始めるとまだ幅・厚みとも繊細さが追い付いていなかったようだ。無理や

り編み目を詰めて材料に無理をさせた。その結果、まあまあのレベルにとりあえずは押さえ込んだ。次に来る色のついた材はどうするか。夜のリモート会議でも煤とか泥とか話題にはなっていたが、そこまで今は考えていられないので、一番手近なところで、黒竹を使うことにした。これも以前作品に使った時の残りで、我が家の玄関前の黒竹。相当薄くしてみたのだが、まだ不十分だったようだ。その上、材質そのものがアズマネザサより力強かったらしい。編み終わったところで形を整えるがうまくいかず、せっかく目を詰めた下の部分まで浮き上がってくる始末だ。クロチク部分だけ編みなおそうかとも思うが、とりあえず今はこれまで、と一旦終了することにした。

改めて確認したら、2色部分のスタートの段が合っていないし、第4ブロックのゴザ目部分が図から読み取った組織と違っているのに気が付いた。大きさも高さ10cmを目指したが、12cmにもなってしまい、お世辞にも復元とはいえない。掲載するのも気が引けるが、こんなものになった。



編み方は、底+側面(第1〜6ブロック)で使い分けられている。
下部の無地に見えるところも5つの層になっている。

妄想いろいろ

鳥浜ツアー翌日は、昨日休館だった博物館で、あらためて開館中の展示を見学。午後には、三方五湖の方へ移動。湖のほとりの舟小屋も見学。簡素なものを想像していたが、立派な屋根がかかっており、黒っぽい

砂利と見えた地面は、すべてヒシの殻だった。

水月湖の湖底堆積物7万年分が見られるはずの「年縞博物館」は時間切れでカットとなったが、「若狭三方縄文博物館」は見学できた。発掘された多くの丸木舟とともに縄文時代の道具だけで復元した丸木舟も展示されていた。並んでいた大型土器の縁の分割デザインは、普通は6分割が多いのだが、ここでは3、4、5、6分割などと多様に並んでいて興味深い。

私は研究者でないから、勝手な妄想OKなので、土器とかごの関連は気になるテーマになっている。縁の部分进行いくつに分割するかというのは、左のかごの場合でも大きなデザイン要素であるから、土器の縁分割とつながりが無いとは言えないような気がしてきた。土器の縁が細かくギザギザと飾られていると、かごの縁仕舞を連想してしまうし、縁周りに小さな穴が並んでいると、縁編みの段には他より大きな隙間が出来たことを思い出す。縄を転がした縄紋は、手間のかかるかごへのあこがれかもしれない、などなど。

ところで、縄文時代の縄の素材としてリョウメンシダというのが数多く出てくる。それほど縄にふさわしい材とは思えないけど、と不思議に思っていた。鳥浜でも見つかり展示されていた。

展示品の「編み布」についていたアンギンというふりがなが気になったこともあって、帰ってきてからアンギンの復興に尽力された滝沢秀一さんの「越後妻有の民俗 一私のメモ帳一」をパラパラめくっていたら、突然、カクマという一節に出会った。

「カクマはシダ類の仲間の植物で、和名ではリョウメンシダ(両面羊歯)のことである。このシダは、葉の裏面がほとんど同じ色調で区別がつかないところからきているらしいが、葉がこまかくやわらかい。それがこのことに適しているのだろう。」

「このこと」、というのはなんとオトシガミ代用のシリヌグイ。落の葉のほうが一般的だが、冬の秋山郷ではこちらが代表的なのだそう。あのリョウメンシダの縄は、使い残りの茎の残物利用だと思うと、すごく納得できるのですが、と、縄文時代のトイレトペーパー事情にまで思いを馳せてしまった。